

夜は魔術師

TOKYO BOOKS

夜は魔術師 ㄆ 300

0293—702802—5170

著者無検印承認

昭和四十五年十月二十日印刷
昭和四十五年十月二十五日發行

著者 邦光史郎

發行者 角谷奈良雄

發行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三一二六
出張所 東京都新宿区弘方町一番地

振替・東京二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

夜は魔術師

邦光史郎



目次

夜は魔術師

五

会社屋

七

虚栄の寺

九

送り屋

一三

二人の黄金

一五

装幀 村上 豊

夜は魔術師

1

九月はじめのことであつた。台風が通過して間もない海はうねりが高く、やや荒れていた。しかし、それも次第に収まる徴候をみせていた。

名古屋港を出帆して香港へ向かう第二鳴尾丸は、ゆっくりと夜明けの熊野灘を航海中であつた。夜間勤務者数名を除く全員は、まだ暁の夢をむさぼっている。

船長上村藤作は、いきなり誰かが扉を開いて部屋へ入ってきた物音に目ざめた。

「大変です、船長、船倉が浸水しています」

「なに、浸水……」

はね起きると、ズボンをはくのも、もどかしい思いで部屋を出た。

朝やけの海にまだ夜の名残りを留めている暗紫色の波がうねり、船は大いなる静寂の中に包み込まれている。

黒く船体を塗った貨物船なのである。

舷側に、黄色いゴムボートが吊るされていた。

ボートは波間に浮かんた。

甲板の上に、人影が二つ三つ現われて、何か大声で喚いている。

だが、ボートは波間にただよいつつ、ゆっくり船を離れて行く。

ぐぐつと吃水が下がり、船はやや斜めに傾きはじめた。そしてそのまま、船首を立て、船尾を波間に呑み込まれて、海底深く引き込まれて行った。まるで何者かが、海中にあって、第二鳴尾丸の船尾を捉えて引きずり込んでしまったようだった。

波が騒ぎ、白い水泡がいちめんに湧き立ち大きな渦を残して、もう船影はどこにも見られはしない。

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町にある勝浦漁業無線局に、海難救助を訴えるSOSが受信されたのは、午前六時を回って間のない頃であった。

「船名は……。位置は……」

俄かに無線局は緊張に包まれ、急報が、田辺海上保安部に届いた。

「東京の、鳴尾産業所属の第二鳴尾丸、船長上村藤作、乗組員十六名、名古屋より香港へ向け航行中、勝浦の南南東百二十キロの地点で浸水、沈没の危険あり、至急救助を乞うとの連絡が入りました」

その知らせは、即刻、鳴尾産業本社に伝えられた。

電話を受取ったのは、前夜から宿直していた立石克也である。

急いで彼は、大下総務課長の自宅へ電話を入れた。

「なに、第二鳴尾丸が……。よし、すぐ行くから、春川部長と、専務に電話しておいてくれんか」
それが午前六時三十分頃のことだった。

立石は、輸出部長春川俊吾の電話番号をしらべた。

——こいつは泣きっ面に蜂だな——

アパートで独身生活をつづけていると、つい独語癖がついてしまう。

——やっこの思いで一億六千万円もの大事なプラントを送り出したかと思うと、たちまちこの始末だ——

さぞ春川部長は、がっかりすることだろうと、ダイヤルの数字を拾う指先が鈍りがちであつた。

「そうか、沈んだのか、そりや大変だ。よし、すぐ行くよ。で、生存者は……」

「まだ、そこまでは分っておりません。それにSOSの発信をキャッチしただけで、沈没したかどうかはまだ確認されていない様子です」

「じゃ、まだなんだな……」

「はい、専務に電話しておきましょうか」

「いや、それは僕がする。あまり騒ぎ立てんようにな。もし、新聞社などが問い合わせてきても、僕が行くまで、よく分らぬと言っておきたまえ」

「はい、かしこまりました」

入社してまだやっと四年目を迎えたばかりの立石にとって、取締役輸出部長の春川俊吾は、いわば雲の上の人物であるといえた。

その部長から箝口令を布かれてしまった以上、彼は貝のように口を閉ざしているよりしかたがない。

——やはり台風の影響か何かで海が時化ていたのだろうか——

だが、それなら近くの港に避難しそうなものだし、警報が出ていた様子もない。それがすこし気持に引かなかったが、それにしても大変なことになってしまった。

そこまで考えた時、いきなり、とんでもないことに気づいた。

俺は何をぼんやりしていたのだろう、あの船に奈津子の父親が乗っている。立石は愕然とした。

——どうして今までそれに気がつかなかったのだろうか——

宿直中、いきなり舞い込んできた椿事のため、やはり気持が動揺していたのだろう。あわてて彼は、奈津子を電話口に呼び出した。

第二鳴尾丸の事務長をしている三隅憲造の家族は、妻の静江と、奈津子、憲一の三人である。

その日の夕方、彼は、杉並にある三隅家を訪れた。

すでにその時は、現場へ急行した巡視船「ちどり」によって、第二鳴尾丸の遭難は確認され、全員絶望という報らせが届いている。

玄関のガラス戸を開けると、ぶんと香煙がただよい流れてくる。

奈津子は、影のように力のない姿を現わした。泣き濡れた臉が脹れ上り、たった一日ですっかり面

変りしてしまつたようだ。

胸をしめつけられる思いで、声もなく、立石は靴を脱いだ。

「大変なことになつちまつたね……」

その一言が新たな悲しみを呼びさましたのだろう、奈津子は、声を立ててはげしく哭き、立石の胸に身を投げかけて肩をふるわせた。

「お母さんたちは……」

「病院へ……」

かすれた声であつた。

「病院……。どうかしたのかい」

「発作を起こしたの、ふだんから心臓が、悪かつたでしょ……」

「で、憲一君がついていつてるの……」

「ええ、だって、電話があるかもしれないし私が家にいなきゃならないでしょ……」

悲歎が、またもう一つの波紋を起こしてしまつたようだ。

「君も、大変だね……」

「どうしていいか、分らないわ……」

身を揉んで、奈津子は哭いた。抱きしめる腕の中で身もだえる女のやわらかい肌が、不謹慎なと自分を叱るあとから、つい男心を唆り、香ぐわしく匂う髪の乱れに、立石は惑乱を覚えさせられた。

なまじからだを知っているから、なおさらなのかもしれない。薄い衣裳一つを通して感じられる女

体の暖さ、しなやかさに、一層抱擁する腕の力が加わった。

「奈津子、困ったことがあったら、なんでも僕に言うんだよ。苦しみを君ひとりで背負うことはない。そうしろ」

うなずきつつ、奈津子は顔を上げた。泣き濡れた女の顔のいじらしさ愛らしさに、立石は唇を寄せた。その頬につたう涙を吸い取ってやろうとしたからだのだ。

磁力にひかれるようにして唇が合い、ほろ苦い奈津子の涙を味わうことによって、立石は女の悲しみを顔かち合おうとした。

「ねえ、もっと強く抱いて……。何もかも忘れさせてほしいの……」

それは女の弱さが言わせた願ひであつたろう。のしかかってくる苦しみの重圧から逃れ出ようとして、奈津子は、男を求めた。

まだどこかに少女期の稚なさを残している初々しいからだであつた。

二階にある奈津子の部屋で、こんな非常の場合にと反省する男と、強い酒に酔い痴れたいと願う女とが抱き合つてもつれからまつていた。

「奈津子、こうなつたら一日も早く結婚してしまおう」

そうすれば正式に彼女を庇つてやれると思つたからなのだ。

けだるいからだを寄り添わせつつ、奈津子はうなずいた。

「ありがとう。でも、隣みからだつたら厭だわ」

「馬鹿な、そんなことを氣にするやつがあるもんか」

バラの莖にも似た乳頭を軽く指先ではじいて、この愛らしい存在を、一刻も早く独占してしまいたいと男は願っていた。

「でもね、変なことがあるの。こんどの航海に出る前、こんどだけは船に乗りたくない、どうも厭なことが起りそうだって、そうお父さんが言っていたとおりになってしまったわ」

「厭なことって、どんなことなんだろう」

蜜のベールを、いきなり引き剥がれた思いで、立石はうっそりと聞き返した。

「何も言わなかったわ。でも、その予感だけはびったりの中してしまったんだわ」

予感ではなく、三隅憲造は、きっと何かを知っていたのだろう、立石はそう直感した。

2

那智勝浦という町は二つの顔をもっている。その一つは鮪漁業の基地であり、もう一つは観光地として最近めきめきと売出していることであつた。

詩人佐藤春夫を偲んで建てた「さんまの歌」の碑が駅前にうずくまり、そこからものの四、五分歩くと、もう海であつた。

両側にせり出した緑の腕の中に、しっかりと抱かれた入江は、湖のように静かである。

この海辺に沿って旅館街がつらなり、遠い岬や、入江の middle に浮かんでいる中ノ島の旅館などは、それぞれに専用の渡し船を出して、客を海の宿へと誘っている。

明るい陽射にみたされた港町であつた。

だが、漂流中、漁船に救われて、この町の病院に収容された上村船長は、まだ薄暗い病室のベッドで眠りつづけている。

高波に揉まれつづけた疲労と、沈没のショックが、すっかり彼を病人に変えてしまったようだ。救助されてから約十二時間ほど眠りつづけ、翌日の午後、やっと彼は睡りの泥沼から逼り上つてきた。

「ここは……」

上村船長は、自分を取り囲んでいる見知らぬ顔を見上げて呟いた。

「病院ですよ。こちらがお医者さん、私は、警察の者です」

「そうですか……」

喜びよりも、むしろ苦し気なひびきにみちた声であつた。

「ところで、あの男は……」

目であたりを探していた。

「あの男？ 誰ですか？ 他にもボートに乗っていた船員がいたんですか」

しかし、船長は、その質問に答える前に、この病室へ入ってきた春川部長に気づいた。

春川は、無言のまま、やや熱っぽい眼差を上村に注ぎかけた。

「ねえ」村船長、あなたの他に、誰かボートに乗っていた人がいるんですか」

もう一度警察官は念を押した。

「いえ……」

強く否定して、ちょっと船長は、適当な言葉を探していたようだ。

「誰もおりませんでした……」

「では、沈没の原因は……」

「実は、午前五時頃、船籍不明の外国船と接触いたしました。そのため船体が損傷してあつという間に海水があふれ込んできて……」

「手の施しようがなかったというんですね」

「そのとおり、すぐ沈没いたしました」

「それで相手の船は全く分りませんか……」

「はい、当て逃げされたのです」

「すると、向うは損害がなかったのでしょうか」

「多分そうでしょう、六千トンクラス的大型貨物船でしたから……。それに、何分第二鳴尾丸は老朽船でして……」

いくぶん言訳めいた陳述であった。

「それで、ボートはいくつありましたか」

「十人乗りの救命ボートが二つです。乗組員が私を含めて十六名でしたから……」

「じゃ、もう一つのボートに他の人たちが……」

「はい、私は、全員が海中へとび込んだのを確認してから一番最後に船を離れました。ところが、何

分沈没の速度が早く、あっという間に渦に巻き込まれて、一たん海中に潜り、こんど浮き上ってみると、目の前にあるボートには、誰も乗っておりませんでした」

「では、もう一つのボートは……」

「それが、どうしても見当らんです。ですから、あるいは遠くへ流されたのではないかと思っておりますが……。まだ発見されておりませんか」

「ええ、今の所、陸地にたどり着いたのは、あなたお一人なのです」

「私ひとりだけですか……」

船長は、深い吐息を洩らした。

そのとき、春川部長が割り込んで声をかけた。

「上村君、苦勞をかけたね……」

「あ、これは部長、申訳ありませんでした。貴重な人命と、船とを喪ってしまいました……」

「いや、不可抗力だよ。当て逃げされたんだから、君の責任じゃない」

部長は、メモを取っている報道関係者を意識している様子だった。

奈津子は、他の留守家族たちと共に、その様子を眺めていた。

——どうして、乗組員中最年長者だった、この上村船長だけが無事だったのだろう——

それが不審でなかった。それに、父の話によると、こんどの航海は、寄せ集めの船員ばかりで、どうも安心できないということだった。

——だから当て逃げなんかされてしまったのだわ——

そうになると、そんな寄せ集めの乗組員たちに航海を命じた会社の責任ということになりはしないだろうか。

いや、こうなった以上、いくら責任を追求したところで、遭難した父たちが戻ってくる訳のもではなかった。

——でも、責めずにはおれない……——

奈津子は、留守家族たちの宿舎に充てられている旅館へ戻ってくると、单身、春川部長の部屋を訪れた。

それは、その日報道された遭難者名簿に、ある男の名前が入っていなかったからなのだ。

「部長さん、今日発表されましたこの名簿に、どうして木原さんが入っておりませんのでしょうか……」

一瞬、春川は、きよとした。

「木原って、そりや一体何者なんだね」

「第二鳴尾丸に乗っていたんですわ。私、出帆の折、見送りに行っていました」

「名古屋へかね……」

「はい、母の実家でございますので……その時父が、木原さんのことを話しておりました」

父は、眉をひそめて、どうしてあんな札つきの男を乗組ませたんだろうと、会社の方針に不満を洩していた。

「ふむ、木原なんて僕は知らんね。それとも誰かを見送りにきていた所じゃなかったのかな」